

柔らかな彫刻、ゆっくりと溶ける

村上美樹



不自由な疎開生活の間に着想したこの新技法は、後述するようにあとで私に随分と幸いした。私は単にこれを新発見したというよりも、その時それと知らずに好運をつかんでいたのである。しかし、人間は、そういう運命をまるで悟らず、盲目的に生きていく。ふり返れば、不思議な感慨におそわれる。

——北村西望『100歳のかたつむり』／1983年／日本経済新聞出版社／133頁

私たちは、普段どれほど「視覚」という一方的な情報に頼って、世界との距離を測っているでしょうか。遠くから眺めるだけの美術は、時に私たちの身体から切り離された存在に感じられることもあります。“美しい”の基準は、個々、それぞれで持つことができます。このワークショップでは、美術を「見るもの」から「手に届く距離、触れる距離」へと引き戻すことを試みます。

かつて、戦時中の金属回収によって、多くのブロンズ彫刻がその姿を消しました。その「喪失」の記憶を、形を自由に変え続ける「セラピーパテ」という流動的な素材を用いて、今ここにある「触覚」のリアリティを確かめます。

ホワイトボードでできたテーブルを囲み、指先で形を紡ぎながら、言葉や図を書き留めていきましょう。

戦中の空襲と金属回収により渋谷駅に設置されていた初代忠犬ハチ公像はいなくなりました。現在、渋谷駅に置かれている忠犬ハチ公像は二代目です。

もし、また無くなったら、三代目忠犬ハチ公像が作られるのでしょうか？

ヘレン・ケラーも触ったとされている記録が残る渋谷駅の忠犬ハチ公像、もっと調べてみると、各地で形や制作者が違えど、いろんなハチ公像が存在します。

このワークショップで、触りながら、自分のパブリック・アート*を作りましょう。自分が思うパブリックな“ハチ公像”はどんな犬になりますか、もしくは、どんな“もの”になりますか。

そこで生まれるのは、完成された作品ではなく、他者と交差する瞬間の痕跡です。

「触れること」から始まる新しい対話を通じて、それぞれの身体が交じり合う「共存範囲」を探ります。“完成”は今後、それぞれでトライしてみましょ。体験をぜひ、お持ち帰りください。

*パブリック・アート

パブリック・アートとは公園や市街地などの公共空間に恒久的に設置される芸術作品。

引用:現代美術用語辞典 1.0パブリック・アート(https://artscape.jp/dictionary/modern/1198431_1637.html)

□導入：彫刻と「触れる」こと

——お家にどんな彫刻、ありますか？

「生活の中にさりげなくある彫刻」についての対話をしてみる。

□体と感覚の認識

粘土をいろんな身体部分(足、肘、膝など)でギュッと握ってみる。

□セラピーパテで身近な気持ちで彫刻をつくる

粘土で自分が掲げたい“像”をつくってみよう。

例えると、ハチ公のような、掲げてほしい気持ちや、ものを、立体にして考えてみる。

□ホワイトボードテーブル*で対話

テーブルをコミュニケーションの場とし、

セラピーパテでの造形と並行して、浮かんできた言葉や記号を書き留める。

テーブルに残された造形と文字の痕跡を全員で眺め、みんなで共有する。

*ホワイトボードテーブルは作家が持参

□短い時間の展覧会

テーブルの上で完成させたセラピーパテをいろんな人に見せましょう。

セラピーパテが完全に溶けるまでのあいだ、展覧会を開催する。

粘土はゆっくりと溶けていきます。形がだんだんと無くなっていくのを横目に、自分や、他の人たちが作った形跡を、溶けた形から思い浮かべながら眺めてみましょう。

対象

どなたでも

(見え方や聞こえ方に特性のある方、お子様、地域の皆様、大歓迎です！)

わたしのことをつづる。

2023年冬、交通事故が原因で、病院に入院していた。

急性期病院から回復期病院に転院したときは地元の秋田に戻ったので、それはある種の疎開生活のようだった。リハビリテーション病院では、理学療法(PT)、言語療法(ST)、作業療法(OT)を毎日各1時間ずつ行われた。自分の事故当初の症状は失語であったため、理学療法、作業療法は純粋な癒しの時間であった。

立体をつくる、絵を描く、が普通の生活をあらゆる人に体感してほしいと改めて思う。

作業療法中、恩師から陶土が送られていたので、陶土で小さなものを作らせてもらった。対応してくれた療法士からは「粘土でもものをつくる人、初めて見ました。見ているだけで、楽しいです。」と、言われる。

作業療法室の出入りをするなかで気になっている素材があったので、陶土に触るタイミングで作業療法士さんに「セラピーパテ」という、油粘土のような素材を触らせてもらった。色の違いで柔らかさが違うこのパテは、指先のリハビリのために使う粘土だと教わる。リハビリテーションは、人によりさまざまな症状に応じて作業療法の方法も変わる。そのなかのひとつである。

柔らかすぎるセラピーパテは、あっという間に溶けていく。

溶けている、のか、セラピーパテ自身のデフォルト化というのか、

セラピーパテを使用してワークショップをしたいという気持ちを持つようになった。このパテなら特性を持っているさまざまな“みんな”が気軽に触って、気軽に表現することができる。わたしが求め得る、表現の自由だ。

北村西望の文章からまた1つ引用する。

人間の体は、何百年たっても、あまり変化がない。作者の主観によって多少は違って見えるが、人体という客観的在りようは、まず動くものではない。私は、そういう人体を忠実に写すことよりも、時々刻々と移りゆく世相と自分の主観を表現することの方が、私の気持ちに合うようになった。それで主観表現を主とし、人体描写は従とすることに決めた。平和像を作った時分からである。この制作態度は今日まで変わっていない。

昔から仏像などは人体描写が従で主観表現が大部分である。だから男女の性別がないように表したり、顔が幾つもあったり、目が三つになったりもする。私は、こういうのが面白いと思うようになった。しかし自分の作るものは、仏像のように定型的な形式に陥らないようにしたい、と考えている。

それに、私の場合、彫刻の表現形式に対する主観よりも、われわれ人間がこの世と関わり合う上で物思う主観の方が、重要になってきている。そして、そういう主観こそ私の主張したいことで、私はこの主張を彫刻で明確に表したい。また見る人のためにも、あまり難解な方法は執らないことにした。

——北村西望『100歳のかたつむり』／1983年／日本経済新聞出版社／186頁

自分の気持ちを大事にした上で、人体像をつくることに徹している。主張していることを明快に伝えるために難解な方法を執らず、われわれ人間がこの世と関わり合う上で物思う主観が重要という部分はとても共感する。

ここに合わせ、「わからない」を受容することも重要であると主張する。

北村西望は無意識に健常前提で文章を書いている。その部分は、心の中で（違うんじゃないかな）と思ったりもするのだが、感情はとても純粋で、尊敬に値する。この心情を用いつつ、わたしはここにもう1つ「わからない」を存在させたい。

失語症になったという自覚がありつつ、言語が思い出せないときは割り切って諦めることも多くなった。（実際はリハビリテーション退院時には”健忘”になっていたもので、健常者と一緒である。）出したい言葉が出ない時は、別の言葉を出すことによって、他の人が言葉を出してくれる。誰も言葉が出せないときも、なんとなく会話は成立する。

海外の場合は翻訳機さえあれば解決できることもあるし、“言葉”が”出せないこと”で誰かを困らせているわけではない、と、念じてコミュニケーションをしている。

「わからない」は、わかるための思考回路をすこしずつ広げてくれる。

<完成>

0:00:00

↓

↓

↓

↓

↓

3:00:00 後

